

blood Looss

Story by Vitr



鎮魂歌

あなたへの鎮魂歌は、これから歌われることになる……

多くの人間は、少なくとも一度ぐらいは
「目の前で起こっている事態が世界のすべてではない」
という感覚を持っていました。邪悪な真理は真実の背後に隠れ、不公平にも合理的で“科学”や“自然の法則”というヴェールで覆い隠されてしまいました。

夜になって影が長くなり、風が木の間を取って“ヒュー”っと鳴り始めると、あなたの心の奥底から恐怖を呼び起こしてしまいます。

それは人間として正しい反応であり、恐怖の先に世界の真の姿がありました。

あなたが一時の間迷い込んだ本当の世界は、人間ではない本当の怪物が隠れています。“怪物なんていない”という嘘のヴェールを剥ぎ取った人には、必ず邂逅する機会が与えられるでしょう。

Vampire: The Requiem(V:tR)では、あなた達は真の世界の住人である“吸血鬼”という不死者として物語を紡ぎます。彼らは生きても死んでもいなく、人間や生物の血を吸うことで生き残り続けています。血族は酷い怪我をものともせず、そして決して老いることもなく、非人間的な能力を振るう事ができます。そんな存在であるにも関わらず、日光や燃え上がる炎、血族をも餌食にする者、沢山のものに恐怖を抱いています。血と暴力に飢えた自身の内面にすら恐怖しています。

吸血鬼の起源はすでに忘れ去られてしまい、多くの血族が恐ろしい罰を犯した罰として神自身から与えられた呪いだと……吸血鬼の間では結論付けられています。昨今、『版図（領土）』の中で最も強力な血族が、より小さい版図や狩場に対してのルールを施行しています。しかし、何が正しいのかは未だ吸血鬼達にも理解できていません。

無限の夜を歩き続けなければいけない事以外……。

世間はいつものように、平凡に時間が流れているかもしれない。

誰かは幸せを掴み……

誰かに不幸が降りかかり……

誰かは欲望を満たし……

誰かに死が満たされていく……

この街は平穏そうに見えて、今日も暗黒が満ちあふれていた。

卑しい目覚め

何の感慨も感じない深淵の領域から、自分の意識が戻されていく。すでに人間ではなくなった身体の中へ、汚れた卑しい血が染み渡っていった。この血は決して身体の血管を歩いて行く事はなく、全身に血が染み渡ると自分の意志とは関係なく瞳が開く。

(ベットの中で気怠い微睡みを感じなくなってから、どれだけ.....過ぎたんだっけかな?)
漆黒で満たされた空間の中を見渡ししながら、部屋の様子に何か変化がないかを探った。

(.....何も変わりはないな)

「繰り返されるような、いつもと同じ日」

何も見えないままベットから半身を起こすと、心の中で決めている歩数分だけ歩いて手を伸ばす。普通のショッピングセンターでは到底取り扱っていない厚い生地で作った断光カーテンを引くと、部屋の中に月明かりと夜街のネオン光が入り込んできた。照らし出された部屋の中は非常に殺風景で、ダブルベッドとその上に置かれた今日の新聞が一誌だけがある。

これも、俺にとってはここ数年で変化しようのない日常だった。

“コン、コン”

慎重かつ、控えめなノックがドアから聞こえてくる。ノックするその音は、厚みがある木材を叩くような音をさせていた。

「起きてるよ」

新聞を手にとらずにゆっくりとした足取りで部屋の中を横断すると、静かにドアをあける。“ギー”と重いモノがゆっくりと動いていく音を立てて視界が広がっていくと、目の前に何か言いたげな表情をしたエリーが立っていた。

「おはよう、エリー」

愁いと潤いで満たされたセルリアンブルーの瞳をジッと見つめると、彼女に微笑みかける。

「おはよう、ニール」

夜暗の後に一番最初にエリーの笑顔を見る事も、俺にとっては変化しようのない日常であった。

変化させたくない日常

細い廊下を向かって奥へ進むにつれて照明が徐々に明るくなり、何か地上へ出てきたのではないか……といつも錯覚させる。

「仕事は、何か残っていたっけ？」

エリーと話しながら突き当たりのドアを開けて、壁と収納棚が一体化している書斎へ入った。どの収納棚にも隙間無く書籍や雑誌が入っている。どの棚へも物を取りに行きやすい場所にワーキングデスクが置いてあり、その上はパソコンの液晶ディスプレイや仕事の資料、大小様々な郵便物が置かれていた。テーブルの上にある資料を見回しながら背もたれの大きいオフィスチェアに腰を深く沈めて、デスクを挟んでエリーと向かい合う。

「新型モバイルPCのレビュー記事は校了し、新規オープンした美術館の紹介記事は校正待ちです。届いた見本誌は洋食器の記事が載っている雑誌と、レストランの記事が載っている雑誌です」彼女はそこで一度言葉を区切ると、オーバーリアクション気味にプリントアウトした用紙を目の前に突き付けてきた。

「こ・れ・は、何かしら……ニール？」

(請求書？ いや、今月はまだ本を買ってないし……)

「そんなに近づけたら、何が書いてあるのか読めないよ」

子供みたいに頬を膨らませたエリーから用紙を受け取ると、素早く目を通していく。そこにはカリフォルニア産ワインの紹介記事が校了したとプリントアウトされてあった。俺は用紙に印刷されている日付と、自分が覚えている範囲のスケジュールを照らし合わせてみる。

(そういえば……)

俺は自分の舌先ではなく、文章として残していたワインの味を思い出した。

(確か、“若いけど、透明感を強調した舌触り”だったな)

「ああ、君が熱で寝込んだ時に受けた仕事じゃないかな？」

「私のEメールボックスに、そんなの一度も届いてなかったっ！！」

エリーと俺はユニットとしてライター業を営んでいて、仕事のメールは二人のメールアドレスへ届くようにしている……はずなんだけど。

「仕事の依頼メールが俺のところに来ないことだってあるよ。君だって、たまにやってるだろ？」

「女性下着のときだけでしょっ！ニールのはカリフォルニアワインじゃない。明らかに私でも書ける仕事だもん」

「いや、まあ……」

(確かに多少の後ろめたさはあったけど、三年物や五年物も飲ませてくれるってあったからなあ)

美味しそうだったので、寝込んでいるエリーには悪いが……こっそり片付けてしまおうという確信的な気持ちはあった。

「その、まあ……なんだ。御馳走様」

「ニールー！！」

こういった他愛ないやり取りも、も俺にとっては変化させたくない掛け替えのない日常である。

訪れた異変

人の理を離れて夜の理を歩くようになってから、一体何度……彼女と夜を迎えただろう。俺はエリーや人間として寿命を謳歌する人達から見れば、一步横へズレた存在だ。

(エリーが上手に歳を重ねていくのを見る度……自分の身の上を思い知る)

今でも、瞼を閉じれば自分が道を踏み外した瞬間を昨日のように思い出せる。自分達以外乗っていない不気味な地下鉄、獣のような腕、血に染まった爪と牙、抗えない痛みと快樂、そしてエリーの泣き顔。

(何を今更……)

いつもより感傷的になっている自分が酷く滑稽に思えて、思わず自分自身を鼻で笑い飛ばした。

「な、何よ？」

どうやら、エリーは彼女自身が笑われたと思ったらしい。そのせいで、収まり掛けてきた彼女の頬がまた膨らんできた。

「ああ、ゴメン。ただ自嘲しただけ」

俺は顎に手を添えると、ここ最近の食事を思い返す。

(ああ、あそこへエリーを連れて行くか……)

「じゃあ、この間のトラットリアへ行こう。お詫びに白のボトルをご馳走するよ。たしか、欧州産が当たり年だったときの逸品を仕入れたって言ってい……あれ？」

よく見ると、今日のエリーは外出するための身支度を既に整えていた。

「これから仕事？」

その途端、彼女はしてやったり……という勝ち誇った笑みを浮かべる。

「ニールならそう言ってくれと、信じていたの！」

(このメールは昼間届いているから、そんな事を企める余裕はあるよな)

俺は見事術中にハマったわけだ。ここはもう、降参するしか道は残されていない。

「郵便物を確認するまで、ちょっと待ってて」

「はい」

嬉しそうにキッチンへ向かうエリーの後ろ姿を苦笑しながら見送ると、ワーキングデスクの上に置かれた郵便物へ視線を落とした。

(見本誌が二冊、支払い請求書と、原稿納品書が数枚。それと……)

用件事に郵便物を分類して見本誌の包みを手にとろうとしたとき、見慣れないハガキが紛れ込んでいる事に気付いた。そのハガキは、パッと見ただけで瞬時に誰かの訃報を知らせるモノだとわかる。宛先は案の定、エリー宛だった。

(この手の郵便が俺に届くなんて事……有り得ないからな)

「エリー、君宛のハガキが紛れ込んでいるよ」

「……あれ、そう？」

彼女が室内履きを”パタパタ”音立てながらやってくるので、内容に目を通さずにエリーへ手渡した。

「パッと見て、吉報を知らせてくれるような内容じゃないのは一目瞭然だけどね……」

「そんな事、言うんじゃ……」

エリーがハガキを裏返した途端、その場で身体を硬直させる。俺は、彼女の変化をいち早く察知した。

「何、どうした？」

しばらく硬直していたエリーは、震えが収まらない手で俺にハガキを手渡し返す。

「ディムが……」

彼女の言葉に、もはや機能していないはずの心臓が高鳴って動機が苦しくなるような幻覚を覚えた。

（そんな馬鹿な！？）

俺は受け取ったハガキを慎重に裏返して、書かれている文面に目を通していく。

「そんなんっ！」

そこに書かれていた文面は、俺がもう涙を流す事ができない存在なのだと……嫌という程に再確認させてくれた。

ディム・ポスサン

ディム・ポスサンという男は、俺がまだ人間だった頃“親友”と呼ぶことのできる友達であり、ライターユニットとして最初の相棒だった。明るく、社交的で、仕事もキッチリとこなせた彼は、イヤツだったと言っても過言ではない。俺が“行方不明”として生前を知っている人達の前から姿を消しても、人伝に彼の話をよく耳にする事があった。確か、近々結婚する予定があったらしい。

「どうしよう、ニール？」

俺は、もう一度ハガキの文面に目を通した。

(俺はあいつの死に顔を見ることも、棺に土を被せてやることも出来ないのか……)

「数日後に教会で葬儀が行われるから、エリーはちゃんと出席するんだぞ」

「……うん」

エリーが俺を見ている事をわかっていながら、心の中を見透かされてしまいそうな気がして、わざと気付かないフリをする。

「俺は……日を改めて墓参りするさ。……そうだ」

今度はちゃんと、彼女と目を合わせた。

「な、何？」

「間違っても、俺の事はバラさないように」

一瞬の間が開いて、エリーは涙を滲ませて笑いながら舌を突き出す。

「しませんよーだっ！」

「さあ、今はご飯を食べに行こうか。今日行かないと、ワインをご馳走しないぞ」

「むう、それはニールのお詫びの気持ちでしょ！！」

エリーが拗ねた子供のように頬を膨らませるのを見て、俺はどこか安堵感を覚えた。

獣同士の邂逅

片手で数えきれない程しかないテーブル席と、店内を二分に出来る程の長いカウンター席を備えているトラットリアが今回訪れている店である。繊細さよりは暖かみを重視した料理やワインを出してくれる良店だ。

美味しいモノを飲み食べして気分を紛らわそうと思っていたのに、まさかこんな小さな店で昔の知り合いを見かける事になるとは……。

「……」

エリーが声に出さず口をパクパクと動かすので、異変を察知した俺は瞬間的に眉間へ力を集めた。一時的ではあるが、これでまったく見覚えのない誰かに見せかけられるはず……。

「はじめまして」

その言葉を聞いて、俺は胸をなで下ろした。エリーともっとゆっくりご飯を食べたかったが、この状況はエリーには悪いが好都合である。

「あんたも、ディムが死んじゃってショックでしょ？」

ワインで酔いが回っているのか、エリー達も勢いに任せてあれこれと話をしていく。

(本当に、俺のことは話さないでいてくれるのだろうか?)

「彼、どこかを悪くしていたって話はなかったの？」

「そんな話は聞いたことないわね。ただ……婚約者と最近ギクシャクしていたっていう噂はあったわね」

(時代の流れってヤツかね……)

「……何でも、愛人がいたんだって」

その言葉は、俺にとってもエリーにとっても意外なものだった。少なくとも俺が知っていた彼は、自分の婚約者を放っておくなんて事はしない。

「相手の人に相当入れ込んでいたらしくて、仕事も上の空だったって。周囲も不安がり始めたところで、今回の事でしょ？」

そこまで聞いて、俺の脳裏には一つの出来事が思い浮かんでいた。

(……可能性はある)

自分の考えを纏めようとした途端、突然身体の奥が瞬間的に熱を帯びる。同時に、俺の方へ視線を投げかけてくる人物を殺してやりたい衝動が沸き上がってきた。

(こ、これは!?)

俺はグラスの中に残っているワインを一気に飲み干すと、自分の内側に猛獣を閉じこめるようなイメージを抱いて必死に衝動を抑え込む。

「どうかした？」

エリーが心配そうに俺の顔を覗き込むので、彼女を心配させないために笑顔で首を横に振った。新しいグラスに注がれたワインを口にする頃には、大人しくなった獣のように衝動が収まって落ち着きを取り戻す。

(さっきの感じだと、初対面の血族が店の中にいるのか……)

あの視線がまだ俺に向けられ続けているので、慎重にそちらへ視線を向ける。視線の先には、数人の取り巻きを連れた一組のカップルが見えた。

(あの二人、どこかで見覚えが……)

自分の記憶を少し探っていくと、男性の方が新しい市長で女性の方が秘書だという事を思い出す

。脳裏がフラッシュバックすると、昨日読んだ新聞記事のイメージが浮かび上がってきた。

（まだ、今日の新聞を読んでなかったっけ）

秘書の方が俺に向かって軽く会釈を済ませると、ゾロゾロとトラットリアから出て行く。

（秘書の方が、血族なのか）

「表に黒塗りの車が停車してあると思ったら、彼らだったのね。あの男性、新任の市長でしょう？」

「二人とも、食事のときに仕事の話をしちゃダメよ」

彼女の言葉に俺とエリーは苦笑しながら顔を見合わせると、目の前の料理へ視線を戻す。

ダリオ・マーケット

「お休み、エリー」

お酒を飲んで頬を赭らめたまま寝息を立てているエリーの寝顔を眺めてから、俺は寝室のドアを閉めた。

「.....さてと」

どこかで一部始終を見守っていたかのように、書斎に置いてある電話の呼び鈴が鳴り始めたのが聞こえる。俺はなるべく音を立てないように早歩きで書斎へ入ると、受話器をすぐに持ち上げた。

<よお、タイミングはバッチリだったかい？>

受話器越しに、喉を潰したような枯れた声が聞こえてくる。

「.....ああ。毎回思うけど、怖いぐらいだよ」

<酔いつぶれた彼女と同伴で店にやってきて店番にメモを残すぐらいだ。あんたにしては、珍しく急いでいるんだろう？>

「ディム・ポスサンについて、遺体安置所の場所も含めて知りたい」

<何だ、ゴシップ誌に記事を寄稿しようって思う程.....あんたも不況の影響を受けているのか？>

「そんなんじゃないよ。ただ、彼が普通の死を迎えた.....という確証が欲しいんだ」

<オーケー、十五分後に店へ。報酬は.....覚悟しろよ？>

話相手の要求する報酬が脳裏を過ぎり、俺は思わずため息を漏らしたくなってきた。

「たまには、現金で払わせてくれ.....」

<堅い事は言いっこ無しだ>

相手の姿が見えなくても、ろくでもない事を考えているのが目に浮かぶ。

「お望みは“赤い本”？ それとも、“黒い本”か？」

<今回は、赤だ>

「だと、思ったよ」

<あんたも、段々とタイミングってヤツがわかるようになってきたんじゃないか？>

「正直なところ、あんまりわかりたくないタイミングだね」

<世渡りっていうのは、覚えておいて損はないぜ。じゃあ、十五分後に>

受話器を元の場所へ戻すと、ワーキングデスクの一番下の引き出しを開けた。開けた引き出しのさらに奥へと手を伸ばすと、薄い小型の金庫へ指が当たる。指の感覚だけで金庫のダイヤルを回すと、“カチリ”と鍵が外れる音が聞こえた。

「さすがに、これもエリーには見せられないからな.....」

赤い装幀の本を取り出した後で金庫の鍵を掛け、引き出しを元に戻す。次は背後にある本棚からラテン語事典を取り出して、そこから朱色に染まった葉を二枚手に取った。

「これだけあれば、十分に足りるだろう」

これから行わなければいけない事を考えると足取りは重い、仕方なく外へ出る。

(せめて、ディムが安らかな死を迎えてくれたはず.....と信じたいね)

街灯やネオンの電光が街を明るさで満たしているものの、すっかり暗くなった夜道を二ブロッ

ク程度歩いて目的の場所へ到着した。

『ダリオ・マーケット』

と小さく出ている看板の真下に設置されているブザーを数回押す。それ程待たせる事無く、音をたてずにドアが開かれた。

「いらっしやいませ、ニール様」

開いたドアが作り出す陰に隠れるように、黒いロングドレスを着て赤いリボンの付いたホワイトブリムをかぶった少女が立っているの見える。

（赤……ね）

室内を見渡すと、生活必需品やら民族雑貨まで所狭しと敷き詰められていて、天井からも物が色々つり下がっている見慣れた光景が目飛び込んできた。

「……もうちょっと整理すれば？」

「バカを言え。すごい整理されているじゃないか？」

キャッシュディスプレイの電光表示部分がどうにか見えている場所から、トルソーのような色や艶をしている皮膚の腕が現れる。その次に出てきたのは神経質そうな顔だ。その顔も腕と同じような皮膚をしている。

「ここに住んでみれば、どれ程の機能美があるのか堪能できるぞ？」

俺に向かって投げられたノートサイズの茶封筒を、どうにか空中でキャッチした。

「機能美はともかく、仕事の速さは感心できるね」

封を切って中を開けると、数枚のプリントアウトされた用紙が出てくる。自分が覚えているより歳を取ったディムの写真と見覚えのない女性の写真も一緒に出てきた。

「……個人的な用件って事は、人となりは知っていると思っていかな？」

俺は、手振りだけで話を次へ進むように催促する。

「はい、はい。最近も色々話題性のある記事を書いていたようだが、自身の結婚話の他にスキャンダルもあったようだ」

「スキャンダル？」

俺は思わず、見覚えのない女性の写真へ視線を落とした。

「それは、婚約者の写真だ。まあ、考えている事は外れてないけどな。そんなキュートな婚約者がいるっていうのに、浮気しているっていうんだから……人間ってヤツはしょうもない」

「俺達も、もともとはしょうもない人間だぞ」

自分の目で彼が作ってくれた報告書に目を通していく。確かに、浮気をしていた決定的な証拠はそろっていたようだ。

（トラットリアでもその事を聞いていたが、本当だったか）

色々なところからニュースソースを集めてきてくれていて、死因は外的要因ではなく心臓発作だと伝えているらしい。

（心臓発作って書かれている事は、死因は特定できてない……）

「もう忘れたね。何せ、そろそろ人間をやめて……三十年かな？」

「その間、メイドを雇って引き籠もり？ ディムの遺体安置所の場所は？」

ニールの真似をするかのように、今度は彼が手振りで先を読むように促した。俺は指示されるままに最後までザッと目を通した。

「五一モルグ？死因が特定できなかつたり、説明できない死体が安置されている場所じゃないか……」

「短い時間だったから詳しい事を調べきることはできなかったが、どうも死体が表沙汰にできな

いような状況らしい」

一番起こって欲しくない状況を迎え入れる事になってしまい、俺は思わず舌打ちする。

「あんたには、こんなモノ必要ないと思ったが」

トルソーの腕が俺へ手渡したモノは、モルグへの入館証カードだった。

「そんな事ないよ。これがあれば、血を無駄に使わなくて済む」

壁に掛かっている柱時計を見上げると、時計の針は午前一時を指し示している。

(五一モルグなら、夜明け前にアパートへ帰れるな)

「さて、ここまでの報酬について相談をしようじゃないか」

彼が差し出してきた紙を見て、俺は思わず驚きの声を上げた。

「あんたにしては、随分と謙虚な内容だな？」

「馬鹿を言え、情報に見合う分だよ」

「.....」

何も言わずに表情を無くした彼の顔を眺めていると、観念したかのように顔を背ける。

「お、俺だってこれぐらいのサービスをする良心を.....人間性と一緒に捨てた訳じゃない」

「わかったよ」

俺は自分で持ってきた赤い本の表紙に手を当てると、表紙と手の平の間に血が集まるように意識を集中した。

(血が.....血が蒸発するイメージを.....)

瞬間的にカッと身体の中が灼熱の熱さを持ったかと思うと、本と手の平の間で膨大なエネルギーを内蔵したナニかが一気に凝縮する。

闇のタクシー

ダリオ・マーケットの裏口から外へ出た俺は、顔色が普段より青白くなり……かなり衰弱した状態になってしまっていた。

「量や大きさに関係なく、アレはキツイ……」

見た目が明らかに萎んで震える手で、上着ポケットに入れておいた朱色の葉を掴み出す。それを何とか口の中へ入れると、ゆっくりと噛み締めた。次の瞬間、まるで自分が乾いた土なのではないかと思える程……勢い良く葉から溢れ出すモノを吸収していく。瞬く間に震えが納まると、手がいつも見慣れた大きさへと戻っていた。

「“父”や長老、そして公子閣下があまり苦勞を必要とせず力を行使できるのが……正直羨ましいところだ」

上着のポケットからもう一枚葉を取り出すと、それをまた口の中に入れて噛み締めた。まだ幾分か身体にしこりが残っているが、どうにか歩けるぐらいに体調は戻ったらしい。

「今度の原稿料が入ったら、自転車でも買うか……」

いつもより遅い歩調で歩き始めて一ブロック歩ききったとき、後ろから車のクラクションが聞こえてきた。振り返ると、黄色い車体のタクシーが俺の背後で停車した。

「大丈夫かい、明らかにフラフラだぜ？」

「……お前の顔は、フロントガラス越しでも心臓に悪い」

運転席のドアが開いたかと思うと、人間としてはあまりにも特徴がありすぎる男がタクシーから降りてくる。尖った鼻や顎はもはや人間と分類するには、中々インパクトのある形だ。

「その言葉、俺をバカにしているのか？」

「いや、褒め言葉さ。おかげで目が覚めた」

背筋をピンと伸ばすと、運転席から出てきた男はニヤリと笑う。

（正直、初対面のヤツがこの顔を見たら気絶するんだろなあ）

「それで、こんなフラフラな身体でどこへ行こうって言うんだい？」

ふと、適当な事を言っておまかせと思ったが、彼相手に嘘をついても良い事が無い……と思い直した。

「五一モルグまで、ちょっと確かめたい事があるね」

「そんなフラフラした足取りで行ったら、太陽が昇ってしまうぜ」

男は少し考えた後で、タクシーの後部座席を親指で指す。

「対人の偽装を解いちゃったから今日はもう仕事できないし、足変わりになってやるよ」

（嘘をつかないで正解）

タクシーの後部座席へ乗り込むと、俺は運転席と後部座席を隔てる防弾ガラスを数回叩いた。

「恩に着るよ。正直、歩いてモルグまで辿り着けるかどうか自信がなかったんだよ」

「あんたは、俺に嘘をつかないからな。これはサービスだ」

彼が前を向くと、タクシーはゆっくりと発進する。

五一モルグ

「帰りの足変わりにもなってやるから、用事を済ませてこい」

タクシーを降りた途端、運転席から何かが投げられた。

(今日は、よく物を投げられる.....)

投げられた物を無事にキャッチすると、何か液体が入っているパックだという事がわかる。そして、手に持っただけでそれが何なのかすぐに理解できた。

「あんた、まだ血が足りてないぜ。その代金は後払って事にしておいてやるよ」

「用事を済ませている間に請求書を作っておいてくれ」

パックの先端を噛みちぎると、中身を一気に吸い尽くす。人間としての内臓器官がすべて機能していないのに、どこかで満腹感を感じたような気がした。

(ただの幻覚でしかないのにな.....)

モルグの出入り口に置いてある灰皿に空のパックを投げ捨てると、目が覚めたときと先程までのフラフラした足取りが嘘のように力強い足取りでモルグの中へ入っていく。

「どうしたんですか、こんな夜更けに？」

受付まで来ると、白衣を着た黒人男性が片手にドーナツ、もう片方には新聞を持って立ち上がった。

「深夜にドーナツ？」

入館証カードを手渡すと、男は新聞を置いてカードを機械へ通す。

「三三モルグ？ 中央地区担当のチーフが何用ですか？」

俺は昨日のニュースを読んでいないことを思い出して、受付の男性が置いた新聞を取り上げた。

「フラットマンを呼んで来てくれ。まだいるだろう？」

男は何か見当違いな事情に思考が辿り着いたらしく、俺の顔を見てニヤリとほくそ笑む。

(その眉間に、熱した鉄ののべ棒でも埋め込んでやりたいね.....)

「彼との賭けは.....分が悪いと思いますよ」

「肝に銘じておくよ」

これ以上話を聞くのも面倒なので、手振りで早く呼ぶように促した。

(世界は、未だ暗黒の世界と離別できず.....)

視線を新聞から離す事無く、新聞の一面を飾っている写真を見る。その写真にはトラットリアで見かけた二人が写っていて、“新・市長、第一の公約を実現させる”と見出しが付いていた。

「闇の社会は、まだ確実に人の政治へ深く根を下ろしているわけだ」

(エリーはどうだかわからないが、俺は自分を写真に残したくないな)

本来、俺のような存在は写真や記録媒体に姿を残すことができない。こうやって写真に写るためだったり、人前で生きている人間みたいに見せかけるには、力の行使と血の蒸発を必要とした。

「三三モルグのお偉いさんが俺に.....」

通路の奥から歩いてきた身なりを気にしていない中年男性が俺の姿を見た途端、歩みを止める。何をしに来たのか察したようで、ウィンクしてみせた。

(.....気色悪い。中年野郎のする仕草じゃない)

「今度は、もっと早く来てくださいよ。今日がたまたま当直だったから良かったものを」

どうやら、彼もこの小芝居に付き合ってくれるらしい。

「良い話も悪い話も、起きてから寝るまでに済ませたい性分だね」

「では、どうぞ……こちらへ」

彼が促すまま通路を奥へ進み、受付が見えなくなった途端に表情を崩した。

「これは一体なんの冗談なんだ？ エイプリルフールはもう終わったと記憶しているんだけどな？」

「時には善意が偶然を生むことがあるんだ。荒んだ心にジョークが必要だって言うだろう？」
彼が壁に設置されているスキャナーに自分の入館証カードをかざすと、複雑にロックされた扉が音を立てて開く。

「ジョーク一つで殺される世の中だから、賛同はできないがね。それで、今回は何がお望み？」
開いた扉をさらに開けて中へ入ると、霊安室の中央で立ち止まって

「ディム・ポスサン」

と、手短かに用件だけを伝えた。

「……また、オカルトタブロイド記事かい？ 俺はアンタの書くグルメ記事の方が好きなんだがね」

彼は霊安室の奥に仕切られている部屋へと入ると、キーボードのキーを叩く音が聞こえてくる。

「この間、アンタが紹介記事を書いていたキッシュを食べたんだ。確かに美味しかったよ」
モルグで働いているからなのか、彼は肉をほとんど食べず野菜や卵を主食としていた。たまに書いた記事についての感想をくれるので、ありがたい友人である。

「感想をありがとう。それにしても、霊安室にパソコン？」

「今や、霊安室の温度管理まで全自動さ。ところで、毎度の事だが……」

彼が顔だけ見せるので、そっちを見た。

「死体に残っている血を好む者もいるが、俺にその警告はお門違いだ」

自分の言っている言葉を裏付けるかのように、自分の鼻孔に意識を集中させてみる。その途端、死体の匂いと死んでいる血の匂いが気分を悪くさせた。

（こんな事、試してみるんじゃないなかった……）

「さて、君がお望みの情報だ。あいにく遺体の方は、すでにここには無いが……」

部屋から出てきた彼は、カルテ用紙を挟んだバインダーで自分を仰いでみせる。

「情報なら、ここにある」

そのまま、挟んである用紙の端をちぎって俺の手の平へ乗せた。俺は対価として十数枚の紙幣を丸めて束にしたものを一つ手渡した。

「毎度どうも……。これも不思議だが、君はいつもそんな紙の切れ端からどうやって情報を得ているんだい？」

「知らないのか？ 紙の味には書かれた情報が染み込んでいるんだ。文筆の才能がある人間なら、そこから情報が得られるらしいぞ」

「へえ」

彼がその言葉を間に受けて紙を口にしようとするので、俺は思わず彼の行動を制止した。

「あんたに、エイプリルフールを仕掛け忘れていただけだろう？」

俺の言葉を聞いた途端、彼は大きな声で笑い声をあげる。

「いつ会っても、君は私を楽しませてくれるな」

一足先に霊安室から出つつ、彼に向かって手をヒラヒラと振った。

「今度ランチでもどうだい？」

「悪いね、夜しか食べない主義なんだ」

モルグから出ると、来た時と同じ場所に停車してある黄色いタクシーの後部座席へ乗り込む。

「モルグにべっぴんさんでもいたかい？」

運転席と後部座席を隔てる防弾ガラス越しに、偽装を解いた彼の笑みは今まで以上に緊張感を与えてきた。

「あいにく、死体を愛でる趣味はないよ」

「良い心掛けだ」

牙を剥き出しにして笑う彼を見て気が遠くなりそうなのをどうにか押し留めて冷静さを保つと、手の平に握りしめていた紙切れを自分の血で作った泡で覆うようにイメージしながら、ゆっくりと手を開いていく。

「……」

手の平にある紙の切れ端を元の形へ補正するかのようになり、どこからともなく出現した朱色の繊維物体が勝手に編み込まれて広がっていった。それがモルグで見かけたカルテ用紙程の大きさになると、作り出されたその物体から徐々に朱色が蒸発してレイアウトがされているカルテ用紙が見えてくる。朱色がすべて蒸発すると、『ディム・ポスサン』の死体に関する報告が事細かに書かれているカルテに変貌を遂げた。運転席から一部始終を見ていた彼は、おだてるかのようになり口笛を吹く。

「凄いな、そんな力をお目にするのは……初めてだぜ？」

俺も負け時とニヤリを笑って見せた。

「色々、努力したのさ。輸血パックの予備は残っているかい？」

「背もたれのカバーを外すと、真ん中がハッチに改造してある」

俺は生成したカルテ用紙に目を通しながら片手で背もたれのカバーを外すと、確かに背もたれの真ん中がハッチに改造されている。微かに震え始めている手でハッチを開けると、中は小型冷蔵庫になっていて輸血パックがギッシリと詰まっていた。

「悪いが、後払いでもらうよ」

「そいつも、オレの商売の一つだからな。飲み尽くすなよ？」

彼がそう言った途端、俺は早速輸血パックに吸い付く。『ダリオ・マーケット』から出てタクシーと出会った当初と比べたら、今回の方が消耗は少なかった。

（一日でこんなに血を必要とするとは……）

自分自身を失笑しつつ、親の敵でも睨みつけるかのようにカルテ用紙を一瞥する。

「まっすぐ自宅へ帰るかい？」

その言葉を確実に否定するため、俺はオーバーリアクション気味に首を横へ振った。

「ダメだ、このまま行って欲しいところがある」

俺がある場所の名前を告げると、運転席の彼から笑みが消え失せる。

「本気で言っている……んだよなあ？」

タクシーがゆっくりと走り出すので、俺は窓越しに見える流れている風景の方へ視線を向ける。

「なるべく、荒事は避けたかったのに……」

「無理無理、この都市の一番お偉方近辺にお伺いを立てるんだからよ」

俺は苦笑を浮かべながら、これから向かう先での事を考えて少し憂鬱な気分になっていた。

大きな河川を挟み込むようにして、俺が住んでいる商業都市は発展し続けている。都市の発祥場所である中心地へ向かう程、立ち並ぶ建築物も伝統と古風さを身に纏っていった。

俺を乗せたタクシーが止まったのは、街の中で特に古く格式高い建物が密集する中心区と呼ばれる場所である。その場所には金持ちや好事家連中、それらを相手に商売をしようとする連中が未だにどこからともなく集まってきていた。

「到着したぜ」

運転席に座っている彼の言葉を聞いて顔を上げると、車の窓越しに個人経営の画廊が見える。しかし、俺達のような闇に紛れて生きていく者達にとって、この場所はあまりにも有名だった。タクシーから降りて画廊の前に立つと、その場所からでも何か威圧的な力を感じ取る事ができる。

「お願いが……」

「輸血パックだろ？」

運転席に座っている彼が、再びニヤリと笑ってみせた。さっきまでおぞましいと思っていた彼の不気味な笑みも、今は気持ちを落ち着かせる助けとなってくれる。

「暴れ過ぎんなよ」

「悪いが、肉体派じゃないから……ご期待通りに暴れられないと思うよ」

決意を固めた足取りで、俺は個人画廊へ足を踏み入れた。

(世界の気配が変わっていく。もうすぐ朝日が昇るのか)

俺は、明かりの少ない画廊の隅に置かれている椅子に腰掛けていた。お膳立ても手回しも終わり、話をつけるべき相手が現れるのを待っているだけ。

“ゴンっ”という何かの作動音が鳴り出すと、画廊の中央付近に飾られている一番大きな額縁が天井へ収納された。額縁があった場所には古いカーゴ・エレベーターの檻が見え、誰かが画廊へ昇ってきたのも見える。

「はあ……。小言が五月蠅いボケ老人どもめ」

カーゴの檻が開かれながら女性の溜息と文句が聞こえてきた。少し間を置いて高級そうなスーツを着こなし、髪をアップに纏めた女性が出てくる。

(……来たか)

音を立てずに椅子から立ち上がると、彼女の背後に近寄った。

「ミス・クロリーエン」

いきなり名前を呼ばれたせいで、彼女は一度肩を振るわせてから俺の方へ振り返ろうとする。

「あな……」

彼女が何か言葉を発するよりも早く、俺は横に手を薙いだ。“ヒュッ”という空気が切り裂かれる音が聞こえたかと思うと、彼女の首は少しの皮と肉だけを残して切り裂かれる。人のように斬られた箇所から血が勢いよく噴き出されるわけでもなく、コップから液体が溢れるように彼女の傷口から血が溢れ始めた。

「じ、ぐ……がはあ」

喉をざっくり切り裂かれて上手く言葉を発する事ができない彼女は、喋るのを諦めて傷の再生を試みているらしい。溢れていた血がピタリと止まったかと思うと、傷口が泡立ち始める。俺は素早く彼女の身体を地面に押し倒すと、いつの間にか手に持っていた肉切り包丁を傷口を押しえつけるように差し入れる。異物を間にいれたまま傷口を首と身体を結合させたくないようで、彼女は傷の再生を諦めたようだ。

「……」

何も言葉を発する事無く自分の手の平に意識を集中させると、朱色の繊維物体が現れて物の形を瞬時に創り出す。朱色が落ちて物本来の色が見えたかと思うと、それは一本の刃が長く鋭いナイフとなった。それを躊躇うことなく彼女の心臓に突き刺す。

「ゴゴガ、ドゴダガ……」

「この都市で一番の権力をもつ、俺達と同じ太陽の下をあるけない方『ソマル閣下』の私有画廊……。そんな事は誰だって知っている。あなたが公子の秘書を務めているミス・クロリーエン女史である事も」

「ダッガダ……バゼ？」

「あんた、仕事は出来ても私生活はダラしなさ過ぎだって……閣下が頭を抱えているのを知らないのか？ 俺達は血を吸った相手を極力殺してはいけない。一回だけの吸血行為だけで殺してしまえば餌である人の数も減り、モルグに不審死の遺体が増えれば誰だって否応なく疑い始める。あんたは自分の欲望に正直過ぎたな」

俺は左手で肉切り包丁の柄を掴み、右手で彼女の心臓を指しているナイフの柄を握り直した。

「これは、俺の親友……ディム・ポスサンを吸い殺してくれた復讐だ。首を容器に詰められて死

ぬか、木杭で心臓を刺されて休眠するか……あんたが選べ」

俺がそう言った途端、彼女の身体の中に残っている血が何かの力を振るおうと力を放出し始める。

【無駄だよ、クロリーエン】

若くて中性的な声が画廊全体から響いてきたかと思うと、彼女の身体が痙攣を始め……湯気を立たせ始めた。

（血を……血を沸騰させているんだ）

声の主であるソマル閣下が振るった力の正体に、俺の身体は恐怖心で震えそうになる。

「休眠はさせなくて良い」

ソマル閣下の言葉通り、傷口を押さえていた肉切り包丁の刃に底があたるように巨大な容器を生成した。クロリーエンの頭と身体を繋げていたほんの少しの皮と肉はいとも簡単に千切れ、彼女の頭が入った容器はいとも簡単に生成される。次の瞬間、クロリーエンの身体は色が抜け落ちて……そのまま灰と化して崩れ落ちた。容器に入れられた頭部も同じ末路を辿る。

「うむ、ご苦労であったな。ニール・グリーンヒル」

画廊の奥から、“子供”と表現できる外見の男の子が現れた。色素の薄い肌と白髪の外見が、威厳を備えた雰囲気を実際立たせている。目蓋が開くと、金色の瞳がニールを捉えた。

「秘書としては優秀だったこともあって、あえて黙認していたのが……そもそもの間違いでもあったな。今回の件は私にもミスがある」

「いえ、閣下の私有画廊でこのような私怨を晴らすような事をさせてもらい申し訳ありません」頭を下げようとする、ソマルがそれを手で制する。

「後日とは言え、対価をもらえるのだからお安いご用さ。君が私の都市へやってきて面通しをして以来、君の力には興味があったんだ」

そう言いながら、ソマルは床に落ちているナイフを拾い上げた。反対の手に持っていたディムのカルテを切り裂くと、切られたカルテはボロボロに崩れ落ちて消滅した。

「“ただの空気から”物体を呼び出す力……か。紙の方は、けっこう大雑把に作ってあるんだな」

ソマルはカウンターで何か書き留めると、それを俺に手渡す。

「今度ここへ来るときは、カルテじゃなくてそのメモを見せると良い。ディム・ポスサンの家族と婚約者には少し補填できるように手配しておこう」

「ありがとうございます」

「さあ、あと三十分もすれば朝日が昇るだろう。君の帰りを待っている人の所へ早く戻ると良い」

「では、また後日に」

ソマル閣下に背を向けて画廊から出ると、少しずつ闇が薄れ始めていた。連続して物体を呼び出したこともあって身体の中にほとんど残っていない力を振り絞って、俺はどうかタクシーの後部座席へ崩れ込む。

「疲れた……。まるで血の自転車操業だな」

倒れ込んだ俺の頬に、ヒンヤリとした何かが押しつけられた。目を開けると、潤いと淀みを含んだ瞳の女性が見える。これは血族に心を支配されている証拠だ。街頭で客引きをしている仕事をしているらしく、肌の露出が高く、高級感がある衣服を着ている。

「暴れすぎないんじゃ……なかったのか？ お前のお嬢ちゃんには内緒にしておいてやるよ」俺は答えるのが面倒になって、無言で返答した。しばらくすると、心を支配された女性に身体を抱き起こされる。

(もう新鮮な血でなければ.....自分の内面を抑えられそうに無い)

ゆっくりと走り始めるタクシーの振動を感じながら、彼女が頭を垂れる首筋ではなくて手首に牙を突き立てた。

心の中で、エリーに謝りながら.....。

教会にて

俺が住んでいるこの街の郊外に、年代物の教会がある。中央の身廊を挟むように列柱で建てられた側廊が、正面奥に半円形平面のアプシズがある十字状の教会堂を形作っていた。古代ローマ時代から継承されている外観は、建築学に疎い俺が観ても、改修する必要性を感じさせる。

俺は言葉を一言も発する事なく、教会堂の近くにある霊廟の一角に立ち尽くしていた。見つめている地面には、すでに棺が入れられる準備が整いつつある。

「何だ、そのまま朝日を浴びて灰になりたいのか？」

声が出た方へ視線だけを向けると、修道服に身を包んだ……まるで天使みたいな整った容姿をした子供が立っていた。しかし、笑顔を浮かべている口元には不似合いに伸びている犬歯が見える。

「あの世で幸せに……という別れの挨拶を一足先に済ませただけださ」

手の平に意識を集中させると、どこからともなく出現した朱色の繊維物質が勝手に編み上げられて広がった。それは二つの輪を作り出し、朱色が褪せると簡素な一組の指輪へ変質する。

……俺は、それを放り投げた。

世間は、いつもと同じく平凡に時間が流れているように見えた。

誰かは幸せを掴み……

誰かに不幸が降りかかり……

誰かは欲望を満たし……

誰かに死が満たされていく……

この街は平穏そうに見えて、今日も暗黒が満ちあふれている。

けど、今は昼間という名の休息をしばし……。